

Culture in Psychiatry



ゲーテの『若きウェルテルの悩み』

高橋 正雄 筑波大学人間系教授

1774年、25歳のゲーテ（1749～1832年）が4週間で書き上げたという若き天才の書『若きウェルテルの悩み』には、うつ病を思わせるウェルテルの苦悩と、それに対する周囲の対応が描かれている。

この作品は、ウェルテルという若者が、美しい人妻ロッテに叶わぬ恋をして、最後は自殺するという物語だが、1772年12月21日に自殺する前のウェルテルには、うつ病を思わせる症状が認められる。

たとえば、1771年8月21日の友人ウィルヘルムに宛てた手紙には、「毎朝ぼくは重苦しい夢から醒めてゆき（中略）、涙の川が締めつけられた胸からほとぼしり、ぼくは慰めもなく暗い未来に向かって泣く」と書き、翌8月22日の手紙には、「ぼくの活動力は落ち着きのない無気力に墮し、じっとしていることはできないが、そのくせ何一つすることもできない」と書いている。

また、1772年11月3日の手紙には、「ぼくはベッドに身を横たえるときしばしば、二度と目を覚まさないことを願っている、それどころかときおりは信じている、だのに朝になると目を開き、太陽

を再び見て、惨めな気持ちになる」、「ぼくが十二分に感じているとおり、自分だけにいっさいの罪がある」、「この心は今や死んでいて、そこから感激がもはや流れでることはなく、ぼくの目は乾き、ぼくの五官はもはやさわやかな涙によって慰められることもなく、不安げに額を皺だたせている」と書き、自殺する1週間前の12月14日の手紙にも、次のような文章がある。「ぼくはもうおしまいだ！ ぼくの五官は混乱し、すでに1週間もぼくはもはや思考力を持たず、ぼくの両目は涙にあふれている。どこへ行っても気分が、良くもなければ、悪くもない。何も願わず、何も欲しないのだ。僕は去ったほうがよいのだろう」。

さらに、この物語の語り手も、当時のウェルテルの状態を、「不満と不快が、ウェルテルの魂のなかでますます深く根を張り、ますます固くからみ合い、しだいに彼の全存在を占めた」、「澄みきった天候も、彼の陰鬱な気持ちにはほとんど影響しなかった。鈍い重圧が彼の魂にのしかかり、悲しい映像が彼の胸につきまとい、彼の心はただ悲痛な想念を、次から次へと追いかけるばかりであった」と記

すなど、当時のウェルテルには、うつ病を思わせる症状が顕著である。

すなわち、状況に左右されない持続性の抑うつ気分、覚醒時の不快感、涙もろさ、活動性の低下、焦燥感や自責感、自殺念慮などであるが、そんなうつ病患者ウェルテルに周囲の人々はどのように対処したのだろうか？

まず、彼の恋愛の対象であるロッテは、「あなたはひどいご病気ですわ、いつもは好きなご馳走がお気に召さないので。さあお帰りになって！ お願いですから、安静になさってくださいね」と、ウェルテルが病的な状態で安静が必要なことを認めつつも、それ以上積極的に受診や安静を勧めてはいない。

また、「自制なさってください！ あなたの精神や学問や才能は、どれほどあなたにさまざまな楽しみを与えてくれるかわかりませんわ」とウェルテルに自制を求めるとともに、自分への思いを人生のほかの楽しみに振り向けるよう説得したり、「旅でもなさればたぶん、いいえきつと、気が晴れますわ！ あなたの愛にふさわしい相手を捜して、見つけて、それから帰っていらっしやい」と、気晴ら